



創立

清教学園の前身は、1948年(昭和23)大阪・河内長野教会立の清教塾です。新大陸に渡って神の国の建設を追求した清教徒の信仰に倣おうということから、清教塾と命名しました。中山昇は、師範学校で学ぶ途中で従軍し、終戦とともに病を得て復員。苦闘の末に、信仰を与えられ、日曜学校中等科の教師となります。終戦後の正視にたえない社会の現実と出会い、師範学校を卒業してもどこにも勤めないうで教会立の学校建設に献身する、と宣言しました。

河内長野教会の信徒は、あまりに大きな夢に戸惑いを覚えながら、手はじめに塾を開こうと考えました。清教塾は、公立中学・高校に学ぶ生徒たちが、夜間に聖書を学び、教科の学習もするという同志の集まりで、自分たちは何のために学問するのかを共に考え議論する場でした。やがて、こうした真剣な魂のぶつかり合いができる昼間の学校が欲しいという願いが、中学校建設の夢となっていきました。1951年(昭和26)4月、河内長野市古野町に生徒数49人、三つの教室、7名の教員で(清教学園中学校)が始まりました。



清教学園 校章・マーク
開校当時、美術担当の日本画家 木梨錦嶺を中心に、周りに集った人たちみんなが信仰と教育の夢を語り、それを形にしたもの。十字架・天地創造の神様の御業の光、頭文字のS、それに生かされる命の喜びを木々の芽生えで表わしています。

学校法人 清教学園

〒586-8585 大阪府河内長野市末広町623

TEL : 0721-62-6828 FAX : 0721-63-5048



建学の精神

「清教学園設立趣意書」

神なき教育は知恵ある悪魔をつくる

デンマーク復興の恩人、グルンドウィの主唱したる、三愛主義の根底をなす、基督精神に則った教育の実践が、いかに敗戦日本の現下の教育に必要であることをしみじみ痛感させられる。

戦後、人心の荒廃、道義の失墜も、所詮、神を畏れない悪魔的教育の、単なる遊戯のしからしむるところである。一人ひとりの生きた魂を、神に直結すること以外には、到底日本を救う道はあり得ない。神を畏れず、個々の人格を滅却したる、過去の教育が、軍閥と官僚の走狗となり、遂に、国民をして戦争にまで追い込んだであろうことは、今更いうまでもないことである。

神を愛し、人を愛し、而も真理を追求して知性を高める、真の基督精神の道場たる、生きたる学校の設立を、切望される所以である。

この意味に於いて、本教会は新たに清教学園を興して、現在経営している、財団法人長野基督教会幼稚園の上に、小・中学校及び高等学校・大学に至るまでの一貫したる教育機関をつくるべく、計画を樹立したのである。

そこで、その第一期として、篤信の一婦人の提供になる、長野町大学上古野の高地約一千七百坪の土地に、三年計画にて新制中学校を設立し、更に将来、隣接地に高等学校、大学を設置して、所期の目的を達成する計画である。

本学園の創設及び運営に関しては、内外を通じて、特に理解ある方々のご支援を切望する所以である。

聖句

汝心を尽くし精神を尽くし思いを尽くし／主たる汝の神

を愛すべし／また己の如く汝の隣を愛すべし(ルカ伝一〇・二七)

主の一九五〇年一月一日

長野基督教会内 清教学園設立発起人一同

創立の背景と歴史

清教塾は当初、河内長野教会の幼稚園を間借りしたものでした。当然、塾生が「独立した塾舎が欲しい」と言い出して、中山家の軒に総工費3万円で増築し、一間半に六間の細長い塾舎ができました。清教塾では聖書と教科もさることながら、多くの時間を対話に費やしました。そのうちに戦前戦中の苦い経験をなめた塾生の親たちも、キリスト教を土台に据えた学校の必要を訴え始めました。

学園創設の呼びかけに応じた清教塾の塾生たちは、すぐ行動に移りました。山に出かけて「すくど」(焚きつけ用の松葉などの枯葉)を拾い集め、それを教会員に買い取ってもらいました。当時はかまどで煮炊きをしており、落ち葉を焚き付けに用いていました。このときの売上金770円が、清教学園創設の最初の献金です。この情熱は河内長野の人々にも伝わって、町中に設立運動が広まり、さらには国内外の人々からも心のこもった献金が捧げられるようになりました。

河内長野教会の長老 植田真一は、日本のキリスト教宣教と教育に生涯を捧げた A・D・ヘール宣教師から受洗した人物で、若いころから学校設立の夢を抱いてきました。しかし、30年間教育に携わってきた専門家として、慎重を期していたのですが、ここにきて余生を教会学校建設に捧げようと覚悟しました。敷地探しが始まった年度末に志を立て、決然と公立学校を退職したのでした。

瀬戸内海の豊島で、藤崎誠一の農民福音学校講師をしながら新しい任地を待っていた橋本通が牧師として着任。中山の決意表明に真っ先に応じ、清教学園中学校の初代理事長となりました。

植村環、石川四郎、片山哲、飯島誠太、E・M・クラーク、F・カプチノ、杉山元治郎、賀川豊彦の諸氏に、「神なき教育は知恵ある悪魔をつくる」という活動全体の総意への賛同を求めました。賛同者は、植田が1950年(昭和25)元旦に書き上げた設立趣意書に、賛助員として名を連ねています。教会も設立趣意書を持って、募金運動を大きく展開。塾生たちは、すくど拾いのほかにも、正月休みには一口10円の献金運動に歩き回りました。毎週2回すくど拾いと石鹸売りが続けられたところ、一カ月と経たないうちに資金が1万5000円を超えていました。敷地探しが始まり、中山の両親が、息子に譲るべき家を教会に捧げると申し出ました。また、教会役員の堀秀子も1700坪の屋敷を全部提供すると申し出て、建設運動は大きく前進しました。植田校長も退職金の多くをこのために捧げました。

植田、中山の二人は、建設労働者とともに毎日のように建設現場で働き、教会員や塾生も暇を見つけては奉仕しました。とうとう2階建ての本館が丘の上に建ちました。ところが、府当局は義務教育学校としては不備があるとして認可をしてくれず、行き詰まってしまいました。このときに与えられたのが、日本基督教団の農村センター指定による建築資金の援助です。農村教化と教育を実験するセンターとしての役割を担うということで、援助が得られました。

第2期工事が開始され、一方で、府教育課との交渉を絶えず続け、清教学園中学校の認可に至りました。開校を前にして、長老の辻野正勝も前職を捨て奉職。三人の献身者が与えられての出発でした。



設立当時の河内長野教会の牧師・長老
初代理事長 橋本通牧師(1921年～)／初代校長 植田真一(1896～1989年)／清教塾以来の中心的存在 中山昇(1925年～)／長野教会役員 堀秀子 1700坪の屋敷すべてを学園の用地に提供しました／清教塾生 学校設立の資金集めに真っ先に立ち上がり、すくど拾いや献金運動をしました。
上の写真は、中学校開校式(1951年4月6日)

